

Base mekult city

Ball 101

Bear



の

yoakemae

# PM26:00

ついに一言も拾われることのなかった夢眠ねむのUST放送が終わって、Chromeを閉じてから、課題を書いている途中だったことを思い出した、午前2時。

7月7日。日付が替わってしまったが、僕はまだ6日を起きてる。

明日の授業で提出する課題のアップを催促する織原のメールがケータイに届いていた。googleドキュメントには、織原が作ったのであろう、ほぼ完成形に近い課題の文書がアップされている。名前の欄には、織原のみ。僕の名前はない。

織原 >あとはテキトーにアレンジして自分の名前付け加えておいて

朝日 >(´・ω・´)

夜はまだ長くなって、僕は気合いを入れるために、リビングで珈琲を淹れ、iTunesで若いロックバンドの新譜をDLする。

でもニコ動の「作業用BGM」を聞きながら課題を書く（編集する）ことになったので、その新譜は聴かないまま。珈琲もポットの前に置いてきてしまった。

織原の作った文書には誤字脱字すらなく、日本語も正しいので、手を加える点がない。僕は自分の名前を加えるだけでは織原に悪い気がして、どこかに改善点はなかろうかと織原の文書と、放置していた自分の文書を交互に睨む。

PCにメールが届く。モバゲーで会った女の子にメアドを教えて以来、一日一通メールが届く。名前はなんだっけ……。

“紗々”。

彼女は一人称が“紗々”なので、調べずともすぐに名前が分かる。

彼女のメールは中身がないのにダラダラと長く、語尾に顔文字。

僕のアドレスをサンドバッグに、どこかで聞いたことのあるような綺麗めの言葉を並べる。

紗々曰く、“明けない夜はない(\*´▽`\*)”。

# PM28:00

何も終わらないのは、何も始まらないから。

何も始まらないのは、何にも終わりが見えそうにないから。

着地点を決めないと飛び出せないのは僕の悪い癖で、結局僕は織原の書いた文書に自分の名前を加えただけで、それを完成させた。

夢眠ねむに拾ってもらいたくて眩き過ぎたせいで、Twitterのフォロワーが2減った。それは数値。誰がリムーブしたのかなんて、知らない。

流れる言葉はいつか消え去ることを約束に、先を急ぐ。

言葉は思想は砲弾は矢は、放つから風化するのであって、心の中に抱えている限り、コミュニティの中で温めている限り、大砲の筒ん中にふくんでいる限り、弓を引いた右手を離さぬ限り、それが過去になることはない。始まることによってしか終わりは来ない。

眠らなきゃいけないのに、PCの液晶の光で目が冴える。

なかなか眠る気になれないのは、どうしてだろう。

眠らなきゃいつまで経っても起きられないし、眠らなきゃいつまでも起きていられない。

時計を見ると午前4時。

時計を見るように、窓の外のを一瞥。

# PM28:14

知らない誰かの呟きがTLに流れてくるのを眺めている。

自分が何もせず夜明けを待っているあいだにも、誰かは何かを成し遂げて、何か大きなことを思いついて、誰かと大切なことをやってる。

焦る。

走ると汗をかく事と同じくらい当たり前のように、夜明けまで起きていると無性に寂しくなることがあって。

その寂しさに明確な名はつけられないけれど、言うならば“空白”。

空白には二つの種類があって、特定の誰かにしか埋められないものと、誰でもいいというもの……、今の僕にある空白は明らかに後者の類いのもので、Youtubeで観る西田麻衣で埋められるんだ。

こんな話聞きたくないか、ごめんね。

でもいつか、いつかね、誰かに訊いてみたいんだ僕は。誰かにとっての特定の誰かに、僕はなり得るのかを。

ベッドに寝転び、読みかけのポール・オースターを開いて閉じて、開いて閉じて。そして思う、僕の心にあった空白は、Youtubeで観る西田麻衣でしか埋められないものだったのかもしれない。『日常』のはかせの猫耳では埋められないものだったのかもしれない。今となっては確かめようがないけれど、きっとそうだと思う。

# PM28:58

日付に境界線はない。

明日はいつだって今日の延長線上にあって。

空が白んでくるのを見る時の気持ちが、いつか見た星空の記憶を思い起こさせる。

あの日の延長線上を僕は今確実に生きているし、これから先もその延長線上を歩くのだ。

世界は枝分かれすることなく、いつだってひとつ。

お月様だって、いつもひとつなんだよ。

織原はもう眠っただろうか、眠っただろうな。

僕の部屋には西の窓しかないから、日が昇る東の空は見えないけれども、ああ、それであっても、西の空から一日の始まりを感じ取ることはできるよ。

永遠に思えた夜が明ける。

紗々曰く、“明けない夜はない(\*´▽`\*)”。

# AM5:00

ケータイのアラームが鳴る。  
ここからが明日と決めた。

アラームではなく、織原からの電話だった。  
「おはよう」と彼女は言った。  
ここからが明日と決めた。

<完>